

献呈の辞

著者	名古 道功
雑誌名	金沢法学 = Kanazawa law review
巻	55
号	2
ページ	1-4
発行年	2013-03-07
URL	http://hdl.handle.net/2297/34413

献呈の辞

梅田康夫教授（日本法制史）、中山博善教授（刑事訴訟法）、井上英夫教授（社会保障法・福祉政策論）、そして鹿島正裕教授（国際関係論）は、二〇一三年（平成二五年）三月をもって定年により金沢大学をご退職されることになりました。私たち、人間社会研究域法学系教員一同は、衷心よりこれを祝し、先生方の長年にわたる教育研究、学内行政、そして社会貢献への情熱ある献身とご業績に対し、敬意を表します。

梅田康夫教授は、一九七〇年（昭和四五年）、東北大学法学部をご卒業になり、引き続き同大学院法学研究科修士課程（基礎法学専攻）に進学されました。そして、一九七八年（昭和五三年）に同博士課程を修了（法学博士）されました。その後、宮城教育大学教育学部講師・助教授を経て、一九八二年（昭和五七年）に、金沢大学法学部（基礎法大講座・日本法制史担当）に着任され、一九八八年（昭和六三年）に教授に昇任されます。二〇〇三年（平成一五年）から評議員、また二〇〇六年（平成一八年）には副学部長の要職に就かれました。一九九二年（平成四年）、大学院社会環境科学研究科の設置に伴い、国際社会環境学専攻（博士課程）教授を併任され、また同後期課程コース長などを歴任されています。

主たる研究は、律令制下の土地法制であり、優れた業績を着実に著されています。またテニス愛好家の一人であり、城内のみならず、現二号館前のテニスコートでも、よくテニスをされていたのを見かけられた方は多いと思います。

梅田教授は、特に大学院などの改組に深く関わってこられました。二〇〇四年（平成一六年）法務研究科の設立に評議員として努力し、また二〇〇六年度（平成一八年度）一般選抜前期日程の入試方法の改革や人間社会環境

研究科への改組についても尽力され、その功績は大きいといえます。

中山教授は、金沢大学法文学部在学中に司法試験に合格され（一九七〇年・昭和四五年）、司法修習を経て、検事に任官されました。一九八七年（昭和六二年）には弁護士登録され、著名な刑事事件での弁護活動などをされています。金沢大学には、二〇〇四年（平成一六年）に赴任され、刑事訴訟法や刑事裁判入門などの講義を担当されました。

中山教授は、若い頃から剣道をされ、部活などにおいても、厳しく学生指導をしていただきました。教授会をはじめとする会議では、研究者教員とは異なる立場から発言され、議論が活発化することになりました。

大学教員と弁護士との「二足のわらじ」を履かれて、さぞかし大変であったと拝察しますが、実務家の経験を生かした講義をされ、学生のみならず教員に対しても大いに刺激を与えていただいたと感謝しております。

井上英夫教授は、一九七〇年（昭和四五年）に早稲田大学第一法学部をご卒業され、引き続き同大学大学院法学研究科修士課程・博士課程（民法法学専攻）に進学後、一九七八年（昭和五三年）に茨城大学人文学部に着任されます。金沢大学法学部には一九八五年（昭和六〇年）に赴任し、一九八八年（昭和六三年）に教授に昇任されました。一九九二年（平成三年）、大学院社会環境科学研究科地域社会環境学専攻（博士課程）教授を併任されています。二〇〇八年（平成二〇年）には、人間社会学域地域創造学類福祉マネジメントコース教授に就任されました。

法学部公共システム学科長（二〇〇三年～二〇〇四年）、人間社会環境研究科比較社会制御論コース長（二〇〇六年～二〇〇七年）などを歴任された後、二期（二〇〇九年度～二〇一一年度）にわたって人間社会環境研究科の研究科長を務められ、特に第二期目は前期課程の改組に精力的に取り組まれました。（旧）三専攻が、学

類に合わせて五専攻となり、専攻内容がわかりやすくなったのは、そのご尽力の賜物です。

井上教授は、日本社会保障法学会代表理事のほか、国・自治体の多くの委員に就任され、幅広く活躍されています。また研究スタイルは実践的なものであるため、活動範囲が広く、国内のみならず、国外へも文字通り飛び回り、多忙を極められていました。それにもかかわらず、膨大な数の著作を公刊され、また学部ゼミ及び大学院において、多数の有能な社会保障法・福祉政策論の研究者を育てられた点は特筆すべきです。

鹿島教授は、一九七一年（昭和四六年）、東京大学教養学部を卒業になり、引き続き同大学院社会学研究科国際関係論専門課程修士課程に進学されました。そして、同博士課程在学中にハンガリー科学アカデミー歴史学研究所に留学されています。金沢大学には、一九八二年（昭和五七年）に着任され、講師・助教授を経て、一九八八年（昭和六三年）に教授に昇任されました。

鹿島教授は、評議員のほか、政治学関係の教員の中心として、公共システム学科長などを歴任された後、国際学類の新設でも尽力され、学類長（二期）として、その礎を築くのに献身された点は特筆すべきです。

研究では、東欧と中東を専門領域にされ、多くの著作があり、二〇〇〇年（平成十二年）には学術博士号（東京大学大学院総合文化研究科）を取得されています。

鹿島教授は、ハンガリーのほか、アメリカ、エジプト、そしてフランスでの留学・研修に代表されるように、国際経験豊富であり、法学部時代には希有であった英語に堪能な教員の一人です。このため、学部（学類）や大学院などでも多くの留学生を指導され、今日、求められている英語による講義の先鞭をつけられ、金沢大学の国際化に大いに寄与された点は、特に記憶に留めるべきといえます。

金沢大学法学部発足直後に赴任され、長く在籍された先生が辞められることになってさみしい思いを禁じ得ません。特に、井上さん、梅田さん、そして鹿島さん（最後に、普段通りこのように呼ばせてもらいます。）の三人は、私ともども数少なくなった「城内組」（一九八九年角間移転以前に着任した教員）であるだけに、万感胸に迫るものがあります。

最後になりましたが、定年後の第二の人生では、在職中にはなし得なかったことも含めて、さまざまな分野において今後とも活躍されることをご祈念するとともに、法学系、そして金沢大学を暖かいまなざしでもって見守り、叱咤激励していただきたいと念願致しております。

金沢大学人間社会研究域法学系長

名 古 道 功